



映画のクリエイティブ要素としての「日本」

UCLA School of Theater, Film And Television, Producers Program

田近 昌也

目 次

1. はじめに.....	2
2. 日本が関わったハリウッド映画作品の分類.....	2
3. 作品の舞台としての日本.....	4
4. 戦争の敵役として.....	5
5. 日本と関係の深い作品の予算規模.....	6
6. 共感を引き出すことの重要性.....	7
7. 日本の IP 作品.....	8
8. 日本人キャラクターと日本のマーケット.....	9
9. 日本のマーケットの価値-世界 3 位の現状.....	10
10. まとめ.....	11

1. はじめに

世界中のあらゆる情報が短時間で簡単に手に入るようになった現在、アートにおいても、作品のインスピレーションの源は世界中から得ることができる。多くのハリウッド映画や米国で公開されているテレビ番組においても、多数派である白人社会の文化以外の要素が、作品のメインのテーマとなっていることも多く、映画の基となる小説やストーリーも世界中のマーケットから探し出されている。その中で、「日本」というキーワードが重要な意味をもつ作品が、ハリウッドの有名な監督やプロデューサーによって手がけられることも多く、それらの作品は、世界中の人々が日本に目を向けるひとつのきっかけになっている。

本稿では、ハリウッド映画において「日本」がどのように取り上げられているのかを、いくつかのパターンに分類するとともに、日本と関係の深い映画をハリウッドで製作する際に適した予算規模や傾向などについて考察したい。

2. 日本が関わったハリウッド映画作品の分類

ハリウッド映画において日本が何らかの形で関わっている作品は、これまでも Ridley Scott 監督による『ブラック・レイン』(1989) や Sofia Coppola 監督の『ロスト・イン・トランスレーション』(2003) など数多くあったが、最近 10 年以内に米国で劇場公開された作品に絞ってみると、『ワイルド・スピード X3 TOKYO DRIFT』『バベル』『硫黄島からの手紙』『インセプション』『ウルヴァリン: SAMURAI』等、30 本ほどが挙げられる (※表 1)。

表 1：最近 10 年間に米国で劇場公開された日本が関わる主な作品

2006 年	『ワイルド・スピード X3 TOKYO DRIFT』『バベル』『硫黄島からの手紙』
2010 年	『インセプション』
2011 年	『カーズ 2』
2013 年	『パシフィック・リム』『ウルヴァリン: SAMURAI』『47RONIN』『オールド・ボーイ』
2014 年	『ベイマックス』『オール・ユー・ニード・イズ・キル』『不屈の男 アンブローケン』
2015 年	『THE FOREST』(日本未公開)
2016 年	『THE SEA OF TREES』(邦題『追憶の森』)

これ以外にも、米国の Amazon で 2015 年 1 月にパイロット版が公開され、その後 11 月に第 1 シーズン全エピソードが視聴可能となったドラマシリーズ『The Man in the High Castle』も、日本と深く関わりがある。また、現在製作中もしくは製作がアナウンスされている作品としては、『Silence (沈黙)』『Ghost in the Shell (攻殻機動隊)』『Midnight Sun』(『タイヨウのうた』リメイク) などがある。

こうした作品を、そのテーマ、舞台、キャラクター等、日本との関わりによって分類してみると、いくつかのタイプに分けることができる (※表 2)。なお、アニメーション作品においても、例えば『ベイマックス』や『カーズ 2』など、舞台やキャラクターにおいて日本に関わる要素が明確に見られる場合は、該当するカテゴリーに含めている。

表 2：日本との関わりに関する分類

タイトル	IP	テーマ	舞台	ロケー ション	キャラ クター	キャスト ・クルー
呪怨 パンデミック			x	x		x
バベル			x	x	x	x
硫黄島からの手紙	x	x	x	x	x	x
ワイルド・スピード X3 TOKYO DRIFT		x	x	x	x	x
インセプション			x	x	x	x
カーズ 2			x	x		
パシフィック・リム					x	x
ウルヴァリン: SAMURAI			x	x	x	x
オールド・ボーイ	x					
47RONIN	x		x	x	x	x
不屈の男 アンブローケン			x	x	x	x
ベイマックス			x		x	
オール・ユー・ニード・イズ・キル	x					

以下は製作中・製作アナウンス作品

Silence (2016)	x	x	x		x	x
Death Note	x					
Midnight Sun	x					
Naruto	x					
Akira	x					
Bleach	x					
Dororo	x					
Audition	x					
Ghost in the Shell	x					

3. 作品の舞台としての日本

上記で述べた日本とつながりの深い作品は、アクション、SF、ホラー、アニメーションなど多くのジャンルに渡っているが、とりわけ日本が主要なロケーション、もしくは舞台として使われている映画が多い。日本の建築や街並、あるいはファッションや小物等、独特のスタイルやディテールを持つ見た目は、ハリウッドの映画製作者の中でも魅力的な存在である。先端技術があふれる世界有数の大都市として知られている東京に限ってみても、高層ビルが建ち並ぶ都心部から、江戸の風情を残す下町まで地域ごとの個性が強い。これらの様々な要素が共存している環境は世界的に見ても稀であり、それはハリウッドの映画製作者にとっては、幅広いジャンルに対応できるロケーションであることは疑いようがない。

近年公開された作品の中で、日本がその舞台やロケーションとなっているものは『ウルヴァリン: SAMURAI』『インセプション』『47RONIN』などがあるが、これらの作品では日本の要素を取り入れたプロダクションデザインやコスチュームが、作品のトーンを決めるうえで重要な役割を担っている。

一方、同じく日本を舞台としている作品に『ワイルド・スピード X3 TOKYO DRIFT』があるが、こちらはタイトルから想像できるように、現代の東京の高層ビルとその間を通り抜ける高速道路、東京のファッションや街並が作品の性格を決めるひとつの要素となっている。特に、この『ワイルド・スピード』に加え、和風のセットのみならず、近代的な日本も登場する『ウルヴァリン』、そして東京で生きる孤独な女子高校生が登場する『バベル』は、ネオン輝くビル群が背景に描かれるそれぞれのポスターを見比べることで、製作者が日本及び東京という舞台から観客に何を見せたいのかを推し量ることができる。

また、2014年にディズニーが公開し、全世界で約6億5,782万ドル（※1 / 当時のレートで約780億円）という興行収入を記録した『ベイマックス』は、マーベルコミックスの『Big Hero 6』が原作となっている。アニメ映画化にあたって、作品の舞台は原作通りの東京ではなく、東京とサンフランシスコをミックスさせた「サンフランソーキョー」という街になった。その「サンフランソーキョー」は、1906年の地震によって崩壊してしまったサンフランシスコに日本人が多く移り住んだことにより発展したという設定が与えられており、サンフランシスコの街をベースに、明治から昭和初期の日本と、現代の東京のような近代的な雰囲気を併せ持つディテールが落とし込まれている。この2つの国の文化や見た目が合わさった「ハリブリッド性」は、この映画が、日本や米国のみならず、世界的な大ヒットに繋がった大きな要因のひとつとなっている。映画のArt DirectorをつとめたScott Watanabeによると、この街並を作りだすうえで重要なインスピレーションを与えたのは、製作チームがリサーチのために来日した際に訪れた神戸の北野町という地区であったそうである。歴史的な西洋建築が数多く残る異国情緒漂う街並は、「サンフランソーキョー」のコンセプトともよく合致している。

Amazonのシリーズ『The Man in the High Castle』は、「第2次世界大戦で勝利したドイツと日本に、それぞれ東西を占領された米国」という仮定の歴史に基づくドラマだが、1962年という

時代設定の通り、昭和の日本の要素があふれたサンフランシスコが登場する。このドラマは、米国の大手映画レビューサイト **Rotten Tomatoes** においては肯定的なレビューが **95%** を占め (※2)、**IMDb** でも **8.1** という高いスコアを獲得した (※3)。そして **2015** 年 **12** 月には、早くも第 **2** シーズンへの継続が発表され (※4)、**2016** 年に公開予定である。マーベルコミックスの原作である『ベイマックス』と **1962** 年に発表された小説をもとにした『**The Man in the High Castle**』はそれぞれ作品のトーンや製作の経緯は大きく異なるものの、日本の文化的な要素や街並を、アジア系の人種を多く抱え、米国のアジアへの玄關的側面をもつサンフランシスコと掛け合わせることで、より多くの観客への心理的なアクセスを簡単にすることに成功した良い例であると言える。

(※1) Box Office Mojo Web <<http://www.boxofficemojo.com/movies/?id=disney2014.htm>>

(※2) “The Man in the High Castle: Season 1.” Rotten Tomatoes. Ed. Matt Atchity. Fandango, n.d. Web. <<http://www.rottentomatoes.com/tv/the-man-in-the-high-castle/s01/>>.

(※3) “The Man in the High Castle.” Internet Movie Database. Amazon, n.d. Web. <<http://www.imdb.com/title/tt1740299/>>.

(※4) Littleton, Cynthia. “‘Man In the High Castle,’ ‘Hand of God,’ ‘Red Oaks’ Renewed By Amazon.” Variety. Penske Business Media, LLC, 18 Dec. 2015. Web. <<http://variety.com/2015/tv/news/man-in-the-high-castle-renewed-amazon-season-2-1201665128/>>.

4. 戦争の敵役として

日本がハリウッド映画の中で登場することの多いもうひとつの機会として、戦争の敵役がある。日本と同様に、第2次世界大戦は米国の歴史の中でも重要な意味を持っており、最近でも『フューリー』『不屈の男 アンブローケン』等、この戦争が様々な角度から関わる作品がハリウッドで製作、公開されている。戦争に関わる映画は、ドラマ性が高く、敵・味方の区別が明確であるうえ、特にアクション映画には欠かせない「ヒーロー」を作り上げることができるため、ハリウッドでは好まれるテーマである。そしてその中では、史実に基づきドイツとともに日本が敵役として登場することが多々ある。

先述の Amazon ドラマシリーズ『**The Man in the High Castle**』では、日本に占領されているサンフランシスコが舞台であり、日本人キャラクターが数多く登場するが、これも日本が戦争の敵役として扱われている例の延長線上にあるだろう。作品中の主な言語は英語だが、驚くほど多くの日本語の台詞が含まれている。多くの役が日本人以外の俳優に演じられているのがやや残念ではあるが、Cary-Hiroyuki Tagawa や Joel de la Fuente らが、緊張感がありつつも人間味のある演技をみせている。また『父親たちの星条旗』とペアを成し、日本側からの視点を描いた『硫黄島からの手紙』においても、硫黄島の戦いで命をかけて米国兵と戦った日本兵の姿が描かれている。

過去にも日本人を敵役に据え、残酷な描写を多く含む戦争の映画はあったが、これら2つの作品においては、戦争はあくまでコンテキストであり、それぞれが米国人の登場人物と同じように家族や周りの人間を愛し、自身のおかれた状況に悩む姿を見せるキャラクターとして登場しており、必ずしも日本が一方的な「敵」として描かれているわけではないのが特徴的である。

5. 日本と関係の深い作品の予算規模

映画を製作するにあたり、当然ながら予算によってキャストや監督などのタレントと併せて、ロケーションや作品のスケールが大きく変わってくる。そしてその作品の成功を計るひとつの指標として、興行成績が用いられる。先に述べてきた日本と関係のあるハリウッド公開済み作品13本の予算と興行成績に目を向けてみると、以下のようなになる（※表3）。

表3：日本と関係の深い作品の興行収入

	予算	国内 興行収入	米国 興行収入	海外興行 収入合計	利益率
呪怨パデミック (2006)	20.00		39.14	31.57	354%
ワイルド・スピード X3 TOKYO DRIFT (2006)	60.00	8.33	62.51	95.95	264%
バベル (2006)	25.00	15.00	34.30	101.03	541%
硫黄島からの手紙 (2006)	19.00	42.91	13.76	54.92	361%
インセプション (2010)	160.00	40.90	292.58	532.96	516%
カーズ2 (2011)	200.00	38.12	191.45	368.40	280%
オール・ボーイ (2013)	30.00		2.19	2.67	16%
パシフィック・リム (2013)	190.00	14.50	101.80	309.20	216%
THE WOLVERINE (2013)	120.00	7.99	132.56	282.27	346%
47RONIN (2013)	175.00	2.86	38.36	113.42	87%
ベイマックス (2014)	165.00	76.83	222.53	435.29	399%
オール・ユー・ニード・イズ・キル (2014)	178.00	15.36	100.21	270.34	208%
不屈の男 アンブロークン (2014)	65.00		115.64	47.80	251%

(単位：百万ドル)

通常ハリウッドでは、2,500万ドル以下を低予算作品、5～6,000万ドルクラスの作品を中規模、1億ドルを超える規模の作品が大規模作品として認識されているが、これらの作品の予算を見ると、①2,500万ドル以下…3本、②2,500万～1億ドル…3本、③1億ドル以上…7本となっている。最も多いのは製作費1億ドル以上のメジャースタジオによる映画で、アニメーション作品の『カーズ2』を筆頭に、『パシフィック・リム』『オール・ユー・ニード・イズ・キル』など、2億ドルもしくはそれに近い規模の作品が連なっている。その一方、作品の利益率を見てみると、予算約2,500万ドルに対し1億100万ドルの興行収入をあげた『バベル』が541%と最も高い。その次には予算1億6,000万ドルの『インセプション』と、同規模の『ベイマックス』、そして1,900

万ドルの低予算で作られた『硫黄島からの手紙』が続く。米国外の興行収入を含めても予算を割り込んだ『47RONIN』を除き、10 作品すべてが予算を上回っているが、上位にある 4 作品を見ると、予算規模 2,500 万ドル以下の作品と、1 億 6,000 万ドル前後の作品が最も成功しているということがわかる。現在、ハリウッド映画全体でも、製作予算の二極化が進んでおり、予算規模 1 億ドル以上の大規模映画、いわゆるテントポール映画と言われる作品と、2,500 万ドル以下の低予算と言われる作品が多く作られ、その中間に位置する作品は敬遠されているが、日本と関わりの高い作品の多くでも、そのような傾向が反映されていると言えるだろう。

こうした大規模映画と低予算の映画における日本の関わり方の違いははっきりしている。『ウルヴァリン』『インセプション』『パシフィック・リム』、そしてアニメーション作品の『ベイマックス』『カーズ 2』など、スタジオ製作による作品では、スーパーヒーローものに代表されるような敵・味方がはっきりと分かれた典型的なハリウッド型のストーリー、フィクション化された歴史アクション、SF アクションなどが作られる。製作には潤沢な予算を使い、東京や日本ならではの近代的な街並や、伝統的な見た目をもった建築がその舞台として取り入れられる。

反対に『バベル』『硫黄島からの手紙』など低予算作品は、キャラクターの心理描写や、メッセージ性の高いストーリーに焦点が置かれた純粋なドラマであり、日本が舞台となっているだけでなく、そこから一歩さらに掘り下げた、キャラクターの日本での経験そのものが作品のテーマになるような演出がなされることが多い。10 年以上前の公開作品ではあるが、日本好きな外国人の間で話題となり、400 万ドルという低予算ながら大きな成功を収め、アカデミー作品賞にもノミネートされた『ロスト・イン・トランスレーション』もこの低予算の範囲に含まれるが、同様に東京や京都の街並以上の価値をそこに求めているのがわかる。

予算規模が大きく、大々的な宣伝を行なうことのできるメガバジェット映画の中で日本を取り上げられることによる日本国外へのマーケティング効果は大きいですが、ストーリーやキャラクターの充実度が高く、アート性の高い映画を必要としているターゲットオーディエンスに日本の要素をより強く訴えることを可能にするのはむしろ低予算作品の方である。2006 年から 10 年に渡ってワーナー エンターテイメント ジャパン代表取締役を務めた Bill Ireton も、予算 1,000 万～2,500 万ドルあたりが、日本と深く関係する作品を作るにあたってのボリュームゾーンであると述べている。低予算ではできることが限られるため、ビジュアルに頼らずにストーリーを重視する方向を選ばざるを得ないのは必然である一方、ユニークな日本の俳優を起用し、舞台やキャラクターの存在をより強く印象づけることのできるのも低予算作品ならではの強みである。しかし、ユニークなアート性に走りすぎたために商業的な成功を収めることができない作品も低予算映画には多い。特に日本以外の観客からいかに「共感」を引き出せるかがその作品の成功を左右する。

6. 共感を引き出すことの重要性

ハリウッド映画において、日本の要素が映画で取り上げられている場合、米国では見ることでできない独特の文化や、見た目上の特殊性が強い魅力になっていることが多い。しかしそのユニークさ故に、日本だけにフォーカスを当て、リアリティを追求しすぎることは、日本以外の観客

が遠のく原因となる。映画がヒットする条件として「自分とのつながりを見出せること」が重要と言われるハリウッドにおいては、何かしらの形で米国人をはじめとする世界中の観客が、それぞれ作品とのつながりを見いだすことができる必要がある。「サンフランシスコ」という街の中に世界中の観客が入り込むことのできる魅力を詰め込んだ『ベイマックス』が良い例である。

日本や米国だけでなく全世界的にヒットした『ベイマックス』の興味深いところは、原作コミックの舞台は日本であり、主要なキャラクターも日本人でありながら、アニメ映画化にあたっては、作品の舞台は東京とサンフランシスコをミックスさせた「サンフランシスコ」という街になっており、キャラクターも、日本人と白人の混血であるヒロ、黒人のワサビ、青い目のフレッドに金髪のハニー・レモンなど、人種にも幅がある。こうした変更について、作品のアート・ディレクターである Scott Watanabe は、やはり米国や他の国の観客がそれぞれのキャラクターを通じて作品に個人的なつながりを見出せるようにするためであると説明する。すなわち、日系人でありながら、米国という多民族の環境で生まれ育った背景が、この作品の日本人にとっても、米国人にとっても、そしてそれ以外の人々にとっても、強く共感することのできる舞台を生み出すことを可能にしたのではないだろうか。一方で、彼自身の日系人としてのバックグラウンドは作品のディテールの至る所に活かされており、特にこの作品がアニメ作品でありながら、日本に対する「authenticity」が非常に高いと言われるのは彼の功績によるところが大きい。同様に『バベル』も、日本の要素だけでなく、大都会に住む女子高校生の心に潜む孤独などの心理描写に観客が共感したことが、ヒットに繋がった。

7. 日本の IP 作品

2000 年代の初めに、『リング』シリーズをはじめとして、『呪怨』『ワン・ミス・コール』（『着信アリ』リメイク）など多くのジャパニーズホラーのハリウッド版リメイクが製作され、ハリウッドでもひとつのブームとなった。これらの作品のリメイク権を獲得してヒットさせたことで、ハリウッドで成功を収めたプロデューサーの 1 人として知られるようになったのが、アジア系米国人の Roy Lee である。彼が率いる製作会社 Vertigo Entertainment は、ホラー以外にも日本のマンガが原作となっている『オールド・ボーイ』（2013 年版）や『LEGO ムービー』など多くのヒット作を手がけており、現在は『Death Note』のリメイク版を製作中である。

ところで、この Roy Lee によってプロデュースされた作品に限らず、日本の IP (Intellectual Property / ここでは特に、日本人によって作られたマンガ、アニメ、ドラマ、映画などの著作物のこと) に基づいた作品は、ほぼ完全に米国人による米国のストーリーとして作られており、日本の作品をベースにしている事実は影を潜めている。これまで紹介してきた、日本が舞台となっていて日本人キャラクターが登場する作品は、日本の要素がストーリーに含まれたうえで成り立っており、日本の IP 作品のアダプテーションやリメイクとは性質がまったく違ったものである。アダプテーションやリメイクはストーリーの主要な部分は原作に沿っているものの、登場人物の設定やキャラクターの多くが変更されている場合も多い。日本の IP に基づいた作品の中では、『硫黄島からの手紙』のように日本が舞台であることで作品が成り立っている場合以外は、キャ

ラクターやストーリーそのものを米国化した方が、上で述べたように、米国内や海外のマーケットから共感を得られやすいからである。

日本の IP 作品では、遠藤周作の小説『沈黙』が原作で Martin Scorsese が監督を務める『Silence』や、2006 年に放送されたドラマ『タイヨウのうた』のリメイク『Midnight Sun』などが、2016 年中の公開を予定している。さらに、ここ数年の日本のコミックやアニメの海外でのヒットを受け、上記の『Death Note』リメイク以外にも『AKIRA』『BLEACH』『PLUTO』など、今後 2、3 年先の公開を目指してメジャースタジオ及び大手配給会社によって多くの日本 IP 作品の企画開発、製作が進んでいる (※5)。中でも、特にこのジャンルを会社のメインに位置づけているのは、『アメイジング・スパイダーマン』とその続編を手がけ、ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメントとのファーストトラック契約を結んでいる Arad Productions という製作会社である。現在も『Ghost in the Shell』(原作は日本のマンガ『攻殻機動隊』。2017 年公開予定) を製作しているほか、『メタルギアソリッド』やミニメジャーの Lionsgate と組んだ『ナルト』などを開発中であり、ゲームやマンガ、アニメを原作としたアクションもののアダプテーションに力を入れている。

これらのアダプテーションにおいても、キャラクター、キャスト、ロケーションなどが米国化されたストーリーとして、米国内を主なターゲットとして作られている。しかし、桜坂洋によるライトノベル『オール・ユー・ニード・イズ・キル』を原作とする『Edge of Tomorrow』が Tom Cruise 主演の完全米国化作品として成功したように、マンガだけではなく、さらに多くの日本の IP 作品が、米国のストーリーとして製作される日が来ていると言えるだろう。

米国以外の国で作られた IP をハリウッド映画として製作する際に、完全に米国のストーリーとして作られ、原作との乖離が大きくなると、その国を主なターゲットとして期待することは、難しくなる。前出の Bill Ireton によると、日本はオリジナルの制作者も視聴者も原作に対する思い入れが強く、映画化の際にその忠実性を求める声は他の国よりも強いそうである。今後日本の IP 作品をハリウッドに持ち込むにあたっては、ハリウッド側の声と、日本の原作者側の声の橋渡しをし、バランスを調整できる者の存在が不可欠になる。実際に、日本の原作とあまりにも違う作品となってしまったことで失敗したハリウッド映画は過去にも存在したが、双方の意思の疎通を確実なものとするのが、原作のアダプテーションを成功に導くことの鍵となるのではないだろうか。

(※5) "16 Upcoming Hollywood Anime & Manga Adaptations." Orzzzz. N.p., 2015. Web. <<http://orzzzz.com/16-upcoming-hollywood-anime--manga-adaptations.html/3>>.

8. 日本人キャラクターと日本のマーケット

『47RONIN』には、『ラストサムライ』でも Keanu Reeves と共演し、ハリウッドにおける日本人アクション俳優として確固たる地位を確立した真田広之が出演した。また、『バベル』でアカデミー賞助演女優賞にノミネートされた菊池凜子は、その後の『47RONIN』『パシフィック・リム』でも重要な役を演じた。そして、『硫黄島からの手紙』においては、渡辺謙以外にも、中村

獅童や加瀬亮など多くの日本人俳優が出演し、特に二宮和也の演技が話題となった。これらの配役に関しては、クリエイティブ面でのニーズに加えて、日本が重要なターゲットのひとつであったことが、特に日本で認知度の高い俳優が起用されたひとつの理由である。

一方、Christopher Nolan 監督による『インセプション』には、渡辺謙演じる日本人キャラクターが登場する。このキャラクターは主要人物の1人だが、『ダークナイト』を製作し、すでに大きな地位を築いていた Nolan 監督に加え、アカデミー賞にノミネートされて世界でも知名度が高まっていた渡辺謙以外にも、Leonardo DiCaprio や Joseph Gordon-Levitt といった俳優が出演している同作は、世界中でのヒットがある程度予測されていたものであり、特に日本を重点的にターゲットとする必要はなかった。それはマーベルコミックの原作で、Hugh Jackman の主演というヒット要因がすでにあつた『ウルヴァリン』でも同様で、日本人のキャラクターであっても、特に日本で知名度が高い俳優が起用されているわけではない。渡辺謙や真田広之、菊池凜子など、今やハリウッドでもその地位が確立した俳優たちとは異なり、その他の日本人俳優を起用することは、日本市場におけるヒットを狙える反面、他の地域における商業的なリスクが大きくなる。当然ながら、製作中における英語での演技・コミュニケーション能力の問題も関わってくる。それでも日本人キャストやクルーを起用し、日本をターゲットとすることにメリットがあるのだろうか。

9. 日本のマーケットの価値-世界3位の現状

ここ10年で日本と深く関わっている映画の、総興行収入における日本のシェアを見てみると、日本で特に成功した作品は、『硫黄島からの手紙』の63%、『バベル』の11%などであり、それ以外はおおよそ2~5%と1桁を占めるのみである（※前掲の表3参照）。

現在、興行収入に基づく日本の市場規模は約20億ドル（2014年）となっており、米国、中国に次いで世界3位である（※6）。さらに、米国の配給会社やセールスエージェントなど映画業界の内部では日本に対するリスペクトは強く、映画における質の高さとマーケットの大きさを併せ持った国として認識されており、国際的な映画祭等で受賞経験のある日本人監督やプロデューサーが関わっている作品、あるいは日本で人気のあるIPは、間違いなくハリウッドにおいてもプラスの要素として働くという。

しかしながら、中国の映画市場の台頭と、ここ最近の日本の不況、さらに日本の市場が持つ特殊性の影響で、ハリウッドではフランスや英国といった欧州市場よりも規模が大きいことは忘れられがちになっている。

日本はその市場の特殊性が以前よりハリウッドの中で指摘されており、その対応の難しさが、ハリウッドの映画関係者たちを悩ませてきた。米国のインディペンデント映画の多くが、欧州市場では商業的に成功するチャンスがあると見られているのに対し、日本では、日本人俳優を起用した映画以外では、Brad Pitt、Tom Cruise、Tom Hanks や Angelina Jolie、Scarlett Johansson といった、いわゆるAリスト俳優が出演する映画にヒットのチャンスが偏りがちであることに加えて、日本においてインディペンデント映画は非常に小規模な公開に限られる傾向があり、米国や欧州

等でしばしば見られる、予算規模に反しての大ヒットが起こりにくい。こうした一連の特徴が、市場規模自体では欧州各国を上回っていても、国際的な市場で見比べた場合の存在感が薄れている原因であると、ワーナー エンターテイメント ジャパンで長くハリウッド映画の日本でのマーケティングに携わってきた **Bill Ireton** は指摘する。

映画の売上を決める大きな要素のひとつがキャストであることを鑑みると、上記の『インセプション』や『硫黄島からの手紙』など、日本が舞台となる作品の多くには、日本でも認知度の高い俳優が多数投入されており、日本が主なターゲットのひとつであることが明確である。しかしハリウッド全体で見ると、日本人の役を、日本人キャストではなく日系米国人や他のアジア系米国人の俳優がつとめることも多く、日本の観客を主なターゲットとして取り込むことが作品における重要な使命であるようには見えない。とはいえ、ハリウッドで活躍できる日本人俳優が増えることは、クリエイティブ上の忠実性を高めることができるうえ、日本での注目も上がり、ハリウッドにおける双方の利益につながるだろう。

(※6) "Theatrical Market Statistics 2014." Motion Picture Association of America. Motion Picture Association of America, Inc., Mar. 2015. Web. <<http://www.mpa.org/wp-content/uploads/2015/03/MPAA-Theatrical-Market-Statistics-2014.pdf>>.

10. まとめ

このレポートでは、ハリウッド映画製作における日本の魅力を様々な要素から考えてきたが、上で述べてきた内容から、日本と関係の深い映画をハリウッドで製作するにあたって、それに適した予算の規模や傾向など、作品の大枠が見えてきたように思える。しかし最近のハリウッドで作られる映画は、興行収入の 70%以上を米国外のマーケットであげるなど、米国外のマーケットが映画の全体の利益に占める割合が大きく、初めから全世界をターゲットにした作品も珍しくない。そのような現状では、日本と米国、そしてそれ以外の地域の観客がそれぞれの立場から「共感」できる要素を用意することが、作品の成功のために必要不可欠である。文化的ユニークさや高い忠実性を求めるあまり、その普遍性を失ってしまえば、映画の商業的成功は見込めない。**Clint Eastwood** 監督と長年に渡って作品を作り、『硫黄島からの手紙』をプロデュースした **Robert Lorenz** は、制作時の日本の協力を高く評価しつつも、米国でも売れる映画を作るためには、日本だけでなく、米国にも関係のあるストーリーにすることが重要だと述べている。

ハリウッドにとって、独自の文化が高度に発達した日本市場をターゲットにすることは、急速に成長中の中国市場や、文化的つながりの強い欧州各国をターゲットにすることと違って難易度が高い。また、アダプテーション作品に対して見られる、日本人の原作の忠実性への高いこだわりは、日本の作品をハリウッド映画化し、さらに日本をメインターゲットとして売る上でのリスクを大きくしているかもしれない。しかし、舞台やコスチュームのみならず、日本人キャラクターなどの個々の要素における魅力は依然として強く、高いアート性と説得力を持ち合わせた作品を作ることを可能にする。日本側が、彼らの知らない部分を補助する役割を担うことができれば、

彼らは喜んでその役割を日本人に求めるはずであり、それは間違いなく、日本からハリウッドに提供できる最大の価値である。

聞き取り調査協力者

- Bill Ireton (ワーナー エンターテイメント ジャパン 元代表取締役)
- Robert Lorenz (『硫黄島からの手紙』プロデューサー)
- Scott Watanabe (『ベイマックス』Art Director)